せたかむい
発行・古平町史編纂室
文化会館 ☎42-2590
第180号・平成17・7・1

年表で読む 古平の歴史

《96》

カレイ漁 ②

■カレイ漁の記録

明治四三年の古平町治一覧（古平町で残っている最も古い要覧）に「鰈産額六二石、価格三〇〇円」とあります。また、同四四年の梅野清太郎日記には、カレイ漁について次ぎのように書いています。

▽一月五日　鰈網、大波をおかして出漁す、何れも四、五十貫の漁獲

▽一月九日　真冬には珍しい好天気、寒の入り。鰈船は朝二時に出漁した。沖合いはるかに漁って（すなどって）いるのがあざやかに見える。午後三時頃帰港した。何れも大々漁、二百七十貫より三百貫目、昨年より本年にけての大漁だった。幸い青森通いの汽船が入港したので直ちに積み込んだ

▽一月十一日　船霊祭にも出漁、五、六十貫以上の漁獲

▽三月十三日　鰹の大漁で鰈からぬ。岩内にては鰹漁専門に従事している船もあると聞いた。鰊一尾漁獲の噂とりどり。

カレイの輸送は木箱に詰め、それをムシロで梱包していました。

当時、資金の乏しい者は商家から借り、それをもって歩方契約をしていました。出漁期間は一二月一日から翌年彼岸の当日までとしていました。

大正元年の記録では、二人乗りの磯舟六隻が、延縄で二月から四月まで出漁して次ぎのような漁獲をあげていました。

真カレイ（マガレイ）　二一六〇貫　二九五円
宗八カレイ（ソウハチガレイ）　二〇〇貫　三六円

また、川崎船が一八隻、手繰り網で着業し、七二日間の出漁で次ぎのような漁獲を上げています。

真鰈	九三六〇貫	一一六二円
石鰈	一八〇〇〇貫	一六二〇円
宗八鰈	一二〇〇貫	三六円
黒頭	二五二〇〇貫	二二六八円
砂鰈	二一六〇〇貫	八六四円

→カレイ刺網漁（昭和30年代）

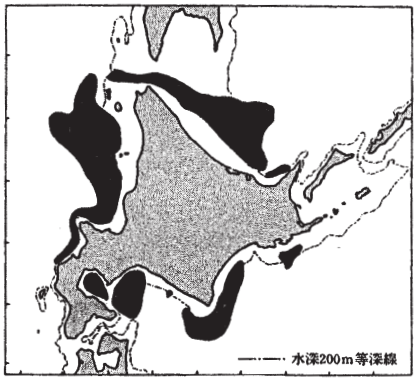
この年、手繰り漁でヒラメ漁も行なわれていて、三六〇〇貫　九〇〇円の漁獲がありました。

大正二年のカレイ刺網漁は時化続きで好漁の日はあまりありませんでしたが、手繰り網は二月中、一日一隻で二〇〇㌔から八〇〇㌔という大漁でした。

また、梅野清太郎は、カレイ網用にウルシ塗りの浮子（あば）を一枚二銭で本州から購入し、ウルシ塗りで海水の含みにくいことを説明して普及に努めたところ、全漁船がこれを使用するようになったそうです。

■カレイ談義

どうしてカレイという名前が



↑アカガレイの漁場図（中央水試）

付いたのだろうか？　と思っていたらありました。

もとは「唐鰈」＝カラエイ、唐（昔の中国にあった国名）の国の鰈（エイ＝カスベ）がなまってカレイになったというのです。それだとエイの後にカレイという名前が生まれたことになり、いまイチすっきりしませんが、この辺にしておきます。日本での本来の字は王余魚（オウヨギョ）です。カレイの形が木の葉に似ているので、魚偏に、草かんむりをとった葉をつけて鰈という文字が一般に使われていますが、これは俗字です。

カレイはちょっと見たところではどれも皆似たような色や形をしているので、大抵の人はみんなどれも「カレイ」でかたづけてしまう。ある料理の本では、まぁ五種類ぐらい区別できれば主婦として一人前――とあったので、古平でとれる主なカレイの図をあげてみました。（図は小学館「魚の図鑑」から）

カレイは漁場が広範囲で一年中とれるので、浜の人達はその時期のものを日常的に食べていますが、浜ではそれぞれ旬（しゅん）のカレイを食べるので、どのように料理してもうまいし特徴のある味ですが、種類によっては嫌う人もいるようです。

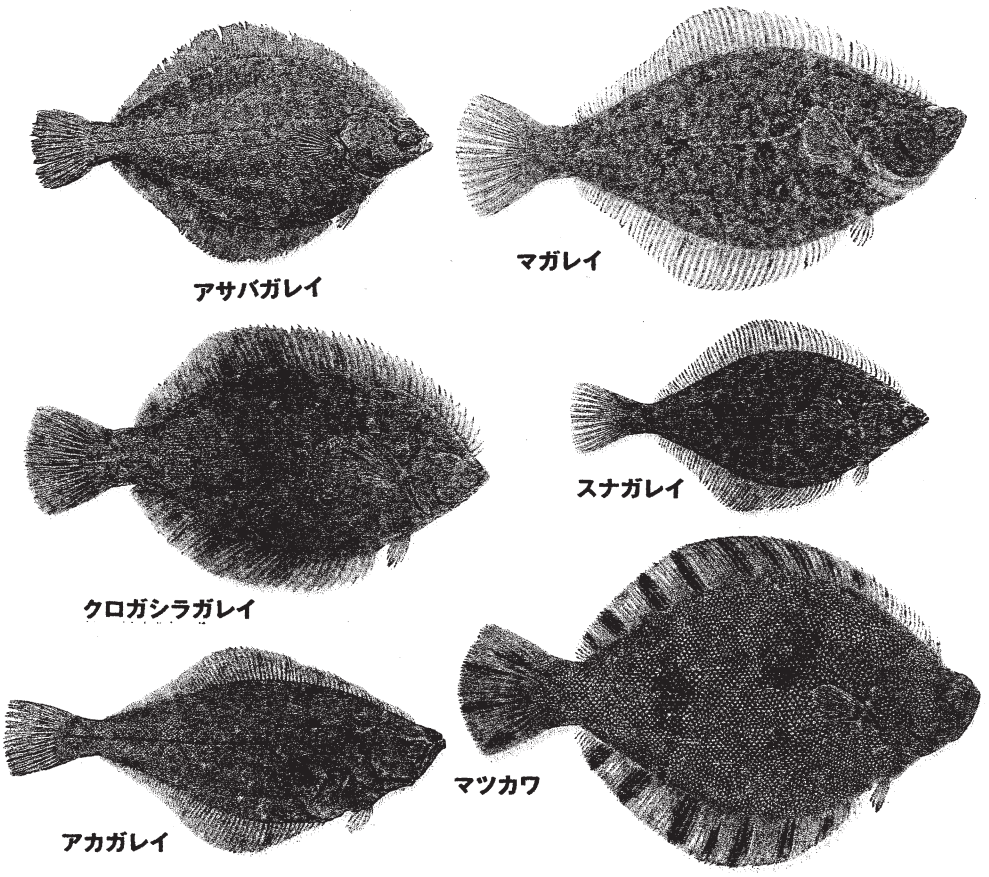
アカガレイは裏側の白いところが、まるで血管が透けているように赤みがあるので嫌う人もいます。しかし、産卵期の二～三月の頃は、煮ても焼いても、刺身にしてもうまく、熟している卵巣は「アカガレの子ッコ」として特に賞味されます。

ソウハチは、昔から宗八と漢字でも書かれています。カレイは一般にそうだと言われていますが、オスはメスに較べて生長が悪く、また寿命が短い。四年以後はほとんどメスだけになる？　と書いてある本があり、余市の中央水試に尋ねたところ、「漁獲して調べた結果では、確かにメスの生存率の方がはるかに高い」とのこと。理由はよくわからないそうです。

この頃は、家庭のレクリエーションをかねて岸壁で釣りを楽しむ人々が多くなってきました。時々見に行くことがありますが、釣り上げたカレイのほとんどは手のひらサイズ、骨が透けて見えるようなレントゲン級です。

築港しかなかった頃、子供たちが港内でよくカレイ釣りをしていました。小さいスナガレイがよく釣れたようでしたが、たまにマガレイなんかが釣れると小さいのでも自慢できました。

大正の末頃は、雑ガレイや傷んだもの、小さいものは処理しきれなくて魚粕にしたといいます。



高野名幸作さんの日記から
当時の世相を見る
《101》

大正一三年　～続く

▼二月一〇日

過日、積丹丸遭難の荷物のこと、西村へ照会したら今日返事が来た。流失したが保険がないので、損害は仕方がないとのことだ。起床八時、珍しい天気快晴、海はナギ、カレ網は皆出た。向かいの電気会社では、かねてから小学生の清書を募集していたが、今日、戸外でその褒章授与をするというので、店の前から黒山の人だかり、子供等は学校が休みなので大勢集っている。書道奨励を広告で出していたが良い思いつきだ。店は今日は割合とひまだ。それでも六〇〇間程出た。

▼二月一一日

起床七時半、紀元節で子供等は学校へ行く。妻も目の廻るような忙しさだ。島泊から大林さんが来て刺網一四〇〇間、外二〇〇間が出た。毎日の客で出ない日はない。今日はカゼ気味で三時頃休む。鎌田さんが来て雪下ろしを手伝ってくれる。美国㊋へアバ縄二〇丸馬車で届ける。

▼二月一二日

起床七時半、海は上ナギ、家では悦三と四郎がカゼ気味で機嫌が悪い。店は今日は割りとヒマだ。刺網八〇〇間出る。私もまだカゼ気味で二時頃休む。

▼二月一三日

起床八時、近来珍しい寒さだ。今日は禅源寺で花まわりがあり、妻と悦三とトミの三人が行く。トミは新調の着物を着て喜んで行く。店は急に客が立て込んで忙しいときがある。刺網あと一万五千間程あるが、この分だと売れるかもしれない。現金売りも一五〇円程あった。一日中雪が降り寒いこと、硯の水も凍る。美国梅野支店の細君が亡くなったとのこと、気の毒なことだ。

▼二月一四日

起床七時、今日も寒い。美国梅野支店の葬式なので、㊋良ちゃんと共に八時二〇分出発する。急ぐようにして九時半に㊋に着く。羽織、袴を着用して挨拶に行く。間もなく読経が始まり、雪の降る中一二時に出棺する。それを見送りしてから㊋に戻り、昼食を馳走になり、一時出発する。古平へ帰る連中と大勢道連れになる。二時半に㊐に着きしばらく休み、三時半帰る。この日一時頃、沖村外佐々木のロカから出火して一棟全焼、消防組も出て大騒ぎになったようだが、火の用心が第一だ。夜、本へ久しぶりに行き一〇時半帰る。星は満天に輝き静かな夜だ。明日は良い天気ならん。

▼二月一五日

今日は文治を連れて小樽へ行く。

▼二月一八日

起床八時、昨日の様子では今日も吹雪で古平へ帰られぬと思っていたら、幸いにも青空になった。妻から電話があり、今日は船もあるから帰ったらよいとのこと。岡崎主人から㊐への伝言があり、小樽一〇時四〇分発の汽車に乗る。空はだんだん晴れ上がり上天気、一二時発の富丸に乗り込み二時に帰る。割合ナギであった。文治の足の良くなったのに皆ビックリする。これでまずひと安心した。今日、刺網二三〇〇間出た。

▼二月一九日

去る一六日来の吹雪、そして寒さ、寒中に劣らぬくらいだ。今日も寒さはずいぶん厳しい。午前九時頃、積丹来岸の曽我さんから、手紙で網九〇〇間の注文が来た。外に一〇〇間余りと計一〇〇〇間余りが出る。毎日のように売れ行きがよい。午前三時頃ヨに行き、岡崎からの伝言を伝える。大事な用件があるようで、㊐では近日中に岡崎へ行くとのこと。夜食を馳走になり一〇時帰る。

▼二月二〇日

起床七時、寒さも少しゆるむ。一日増しに鯡場も近づいてきた。二四、五日には漁夫の先発隊が乗り込んで来るとのこと。久しく沈静の漁村も急に春らしく、元気づくことならん。店は非常に忙しい。美国㊋へ刺網一九〇〇間、外四〇〇間で合計二三〇〇間も出た。アバ縄、ロープ類も売れ行きがよい。文治は小樽から帰ってからは足の方もすっかり良くなり、これで安心した。夜は名月が煌々として静かな夜だ。

▼二月二一日

起床七時、また寒さが戻ったようだ。店は今日もかなり忙しい。島泊の木村から刺網、アバ縄、綿糸類取りに来る。積丹方面からも客があり、合計二一〇〇間出る。アバ縄も二五丸も出た。目下、中アバ縄七〇丸と細アバ縄一二〇丸程になった。今年は実に申し分なき売れ行きだ。刺網もあと七〇〇〇間、改良が二〇〇〇間になった。手当ても適当であったようだ。夜、新地の熊木湯屋のばあさんが亡くなったので通夜に行く。帰ったら九時半、十七夜の月が輝き湾内は静かで、鯡でもとれそうな夜であった。あと一〇日も経てば賑やかになるだろう。

▼二月二二日

寒さが厳しく寒中の如し、店は刺網支度で忙しい。本年は刺網は新地渡辺、一直は品切れ、梅野は少々あるようだが、私のところでは予想以上に出る。アバ縄は昨年の残りもすっかり出た。残りが少ないので、アバ縄を赤泊に注文してあるがまだ着かぬ。この分だと品切れになるかも知れぬ。手配せねばならぬ。刺網八〇〇間出た。夜、㊥で義太夫があるというので、平田弟さんと聞きに行く。なかなか上手であった。㊐おっかさんも行く。

▼二月二三日

起床八時、このところの寒さは寒中の如しだ。去る一五日以来寒さが強く、春らしさは全くない。今日も手足が痛いようだ。店は忙しい。熊さんが留守なので私は大忙しだ。野沢で三〇〇余円、外にアバ縄、網、綿糸類、トワインが出る。夕方になって七〇〇間売れる。手持ちが全部で六〇〇〇間程、この分だとあと四～五〇〇〇間は不足するかも知れぬ。古英丸で田から綿網（建網用）六個、ロープ一五個、二〇〇〇余円分が着いた。

下山口店員が来る。ワラジ、ウスベリなど注文した。積丹丸遭難による荷物のことを話する。船主に交渉、協議中とのこと。夜、八時頃から吹雪が甚だしく吹雪になった

▼二月二四日

起床七時、今日も寒さが厳しい。父は土谷から買った家屋をほごすということで、鎌田さん、才太郎さん、㊥さん等と共にやっている。この寒さではとても仕事もはかどらぬだろう。店は割りとひまだが二〇〇円出た。余市から㊦が来る。四五掛けの網が八円五〇銭とのことで一個分注文する。妻は田のユワさんが小樽へ嫁入りするとのことで手伝いに行く。夜、大へ久しぶりに行く。いろいろ話し一〇時帰る。

▼二月二五日

今日も相変わらず寒い日だ。田のユワさんが小樽へ嫁に行くので、妻が浜まで見送る。漁夫先発隊、本日乗り込み着いた。町は何となく活気付く。店は閑散だ。新開町㊐山口の家に、新地㊤で支店を開店、今日店開き。なかなか立派な店だ。浜町の呉服屋にも影響するだろう。これも商売で仕方ない。

▼二月二六日

朝から雪が降る、昨日より寒さは余程ゆるんできた。店は割りにヒマだが刺網三〇〇間出た。出面が五人来て、ソリ二台で戸外と中庭の雪引きをやる。今月に入ってからずいぶん降った。漁夫が今日も二～三〇〇人が来た。町は追々活気づき賑やかになってきた。小樽から田店員が来る。

▼二月二七日

起床七時、漁夫の数も多くなり、町の人気も引き立つ。建網用品もポツポツ出る。午後から新地方面へ集金に行く。青森方面から漁夫を乗せた汽船が入港、大勢の漁夫が上陸した。行李や飴バチ、下駄なども持った神サン達で町は賑わう。港町㊥、上田、㊥などでは船出し雪割りな

どをやっている。入船町方面では[田]、[の]などでもやっている。あちこち歩き田に寄り話をし六時に帰る。古英丸が来て佐原からのトワイン、[下]山口からのワラジ、ウスベリなどが着く。今日、網五〇〇間、アバ縄三三丸も出た。夜に入り雪が降り、のち吹雪いてきた。

▼二月二八日

この頃の雪と寒さには実に驚いた。寒中のようでまるで春らしくない。店はずいぶん忙しかった、刺網六〇〇間、改良網三〇〇間、計九〇〇間出る。夜、入船町久[ク]で一九歳の長女が亡くなったというので通夜に行く。若いのに可哀相なことだ。ずいぶん寒く吹雪いてきた。[ヨ]に寄り話をして一〇時半帰る。松方の老父、危篤との報あり。

▼二月二九日

起床七時、この頃では早起きであった。店は漁夫も来たのでだんだん忙しくなった。しかし売れるのは建網用品が割りと少なく、ボイル油程度ではとても商売にならない。われわれの店は刺網、カレ網、その他雑漁のお陰が大きい。今日も刺網五〇〇間出た、あと四〇〇〇間程あるが、二〇〇〇間は売りたい。

▼三月一日

毎日毎日寒いことだ。朝の寒暖計は二八度F、この頃は毎日のように客に押しかけられる。今日も起きるや否や美国からの客があった。朝は顔も洗わず、何も食べずに二時頃ようやく食事、妻と二人で一生懸命、売り出しよりも忙しかった。刺網は全部で三四〇〇間出た。うち四〇〇間は現金だった。四、五日前の様子では網もいよいよ終わって、四、五千間は持ち越すだろうと思っていたが、意外にもこれでは不足するやも知れず、二時頃までで正月の初売りよりも多く出た。こんな日があと何日か続いたら品切れだ。困おっかさんが眼の治療で札幌に行かれるというので、夜困に行く。雪は盛んに降り寒いこと寒中の如し。何時になったら春らしくなることやら。

▼三月二日

毎日厳しい寒さが続くことだ。一三、四日頃投網するというのに寒中よりもまだ厳しい寒さだ。今朝など網を測る手が冷たい程だ。タビを二足重ねて履いてもまだ冷たい。建網連中も皆準備に取りかかっている。刺網、今日も現金で五〇〇間、改良一〇〇間出た。残り四千間、改良二千間程になった。この分だと全部売れるだろう。もし品切れになったら余市[セ]からまた一個仕入れるつもりだ。去る二五～六日以来、毎日のように鰊漁夫が入り込み、行李や夜具などを背負ったりして切れ間なく通る。今日、困のおっかさん、眼の治療に札幌に行かれた。困支店主人は山田温泉に出かけた。

▼三月三日

この朝就寝中、六時頃余市から電話とのこと。起きてみると、熊さん余市へ無事着、午後の船で行くとのこと、まずよかった。店では顔を洗う間もなく客に押しかけられる。建網から綿糸、岩糸、実子縄など、刺網からは綿網、綿糸、アバ縄ほか、ボイル油、トワイン等で忙しい。午後二時頃まで売り出しのようだ。妻はエビス倉へ三回も行く。電話も七、八回くる。実に忙しい。今日は一二〇〇間と改良網二〇〇間出た。並はあと六〇〇間だけなので、[セ]清水へ一個二〇〇〇間電話で注文する。明日来ればよいが。熊さんは正午頃着く。ユキ子、トミ等が迎えに行く。子供等はみやげ物に大喜びだ。寒さも雪もなかなかで春らしくない。去る一日は当座帳四枚つけたが、今日は三枚だったが忙しかった。夜、熊さんの佐渡の話で賑やかだ。

▼三月四日

一日増しに鰊場も近づき、町中の人気も何となく活気づく。畑方面からは、馬そりに家財道具やら刺網等を満載して、戦闘準備をして浜に来る。戦闘の開かれるまであと二〇日余りだ。一年の生計の八割程は、この四月のほぼ一ヶ月で勝敗を決し、それによって全町一般が生活していくのがわが古平町だ。追々覚醒して、他に副業的なものを求める手段を講じなければならぬ。店は今日一日中忙しい。刺網六〇〇間残っていたところ、六〇〇間が全部出た。[セ]へ注文

した分、二時頃着いた。ちょうど良かった。熊さんを銀行へやる。夜、信用組合で、日蓮上人の一代記を語る浪花節があり行く。なかなかおもしろかった。

▼三月五日

朝早くから客があり忙しい。昨日来の寒さも余程ゆるむ。熊さんが帰ってきたので、店のほうも大いに助かる。建網、刺網共に目下盛んに準備中だ。古英丸が来て、網、トワイン、柿シブが着いた。柿シブが売れ切れていたが、一樽来たのでよかった。刺網は昨日で全部売り切れ、㋓へ二〇〇〇間注文した分も着いた。今日、久二〇〇間、余別小倉から電話で二〇〇間の注文、合計四〇〇間出た。

▼三月六日

起床七時、この頃は毎日のように、就寝中に二、三回は電話が来る。熊さんが来て助かる。今日も顔も洗わず、朝食も食わぬ。朝から客に押しかけられた。今は建網用品の最盛期だ。アバ縄、実子縄、実子網、ロープ、柿シブが売れる。柿シブは他の店では品切れとかで、一樽来ても二、三日で売り切れる。電話の忙しいこと、一日中、二〇回以上もかかってきたりかけたりした。午後二時頃、新地方面へ行く。本陣の浜、例年なら今頃は漁夫が大勢出て準備、船も並んでいて壮観だが、本年は建物を売って休漁し、タラ釣りや刺網になり、浜はすっかり変わった。世の中は何事も定まりのないものだ。入船町方面では雪引きで、山のような雪だ。㋷さんでは本年から、電力巻揚機でやるということで準備をしている。鰊を獲ってもなかなか苦労のあるもの。㋝、丸、㋚からタラ縄の注文がある。㋖から網代を受け取る。㋓に寄り夜食をよばれ、九時に帰る。

▼三月七日

父は、過日来不快のところ、昨日あたりからだんだん良くなって安心、就寝中、板戸を打つ音が激しく大吹雪になる。この分なら客もなかろうと、骨休みに九時頃まで休む。この吹雪で板戸一枚だけ開けている。来る一五日頃には投網するというのに、吹雪とこの寒さには驚きだ。昨年、一二月から一月までは雪も不足で、こんな楽な年はないと言っていたら、二月中頃から毎日のような雪と寒さで実に意外だ。この頃は雪で店は閑散だが、漁の季節なので刺網二〇〇間売る。入船町種田から三分ロープ一丸注文が来る。熊さん、佐渡からヨへ伝言もあったので、そのついでかたがた新地方面へ行き、八時頃帰る。大吹雪も九時頃静かになる。夜、札幌病院の困おつかさんと、山田温泉の支店の主人へ見舞状を出す。

▼三月八日

昨夜来の吹雪もようやくおさまったが今日も寒さは厳しい。店は目下鰊戦争の準備の真っ最中でなかなか忙しい。刺網、今日は現金で四〇〇円、貸し二〇〇円出た。本年は建網用品は割合少なかったが、刺網用品は予想以上に売れた。殊にアバ縄はこんなにと思うほど気持ちよく売れた。こんなことはない。並アバ縄、改良アバ縄などは大謀で売り尽し、双カセ縄の如きは刺網で売れた。二〇個も補充した。あと一〇〇丸ぐらいになった。全部で一八〇〇丸以上も売った。今春はまた佐渡から一三〇〇丸は買い付けせねばならぬ。夜は帳簿整理をし一二時休む。

▼三月九日

起床八時、今日は日曜日で、子供等が皆家にいるのでなかなか賑やかだ。幸治だけは新地の伊藤先生のところへ補習に入って来る。一四日から庁商受験なので、補習も今日で終わりとのことだ。長らくの厳しい寒さも、今日は大分しのぎ易く春らしくなった。彼岸も近づいたので、これからは良くなるだろう。店は今日もなかなか忙しい。余別から電話で刺網二〇〇間注文があり、小包で出す。外に丸山町から二〇〇間、合計四〇〇間出た。あと六〇〇間になったので、また㋓清水へ電話で一個注文した。一〇時頃注文したら午後三時頃、早速、馬車屋が保木回漕店から運搬して来た。これがあれば大丈夫だ。もしこれも売り尽くすとすれば大々満足、祝杯を挙げてもよい。

〈続く〉

私の戦後六十年

大澤文子

「想い出」…とは、楽しくてそして悲しみの湧くもの。

今更ながら、ひしひしとわが身に蘇ってくる諸々のこと。生まれたばかりの長女を抱え、三歳の長男の手を引き、折々鳴り渡るサイレンの音に怯え、必死になって防空壕を入ったり出たりのあの頃。

札幌市の南十二条西十八丁目に居を構えていたが、前庭横にやや大きめの防空壕が造られていた。夫は常に会社を守るため留守。

昼間でも窓という窓にはやや厚めのカーテンが引かれ、うっすらと部屋は暗い。

夜間は勿論灯りのもれることを禁じられ、街中は暗い。家の電気には黒い被いがかけられ、灯りがもれないようにしていた。少しでも灯りのもれる家があると、役員の人達がきびしく注意をして歩いていた。

また、食料はままならず配給制。恐怖と切なさで長女のための母乳もなく、配給制の牛乳を西線電車通りの個所まで買いにゆかなければならなかった。

長女を背負い、長男の手を引き牛乳配給所まで行って、ながい行列の人群れのあとにつき、順番を待たなければならなかった。

時折、農家の人達がお米、豆類と交換で衣料品を求められることがあった。木綿の品を希望する農家の人達だったが、私には持ち合わせがなく、銘仙地、その他お召し地のものを惜し気もなく何着も手放した。

幼な子達にお汁粉でも…と思っても砂糖も無し、いつもうす塩のお汁粉だった。時には裏庭から蓬、あかざの葉を摘み、煮て片栗粉と混ぜ合わせ、小型にまるめフライパンで焼いておやつにしたこともあった。おはぎを作っても塩あんのおはぎだった。

それでも子供達はお腹がすくので、少しでも食べてくれた。

長男の誕生の時には、実家の両親が五月節句の大きな鯉のぼりを求め、今は亡き弟が屋根高く泳がせて祝ってくれたものだった。

昭和二十年早々に誕生の長女の時には、その頃、博品館という百貨店が札幌四丁目にあったが、店じまいのため全品大安売りの時だった。

母は早速出かけ、六十センチ以上もの日本人形を求めてくれたのだった。朱い縮緬地に青い扇子模様を散らした布地を求めて、お振り袖も縫って着せてくれた。三尺帯も紅絹地できりりとしめ、それは可愛いらしかった。お人形の入るガラス張りの木箱も注文して作ってくれたのだった。

「お祝いよ！」と言って、手押し車に乗せてわが家へ持って来られた時には、まだ誕生して数ケ月より経っていない長女は、両手をバタバタさせて喜んだことを覚えている。その時私は思った。

いつか和やかな世になり、幼な子達が健やかに育っていたならば…きっと長男の玩具、絵本等、そしてこのお人形もきっときっと必要になるのであろう…と思い、夫にも手伝ってもらい防空壕の隅に運んだ。

また、子等の下着類、常備薬品、少々のお金等々を白い大きなボストンバックに収め、玄関口に置いた僅かのすきに、誰？　の仕業かなくなっていた。悲しみの倍増したことは否めない。

『昭和二十年八月十五日』終戦の報を聞いた。

「あー！」一人の幼な子を抱え、夫とともども泣いた。

「あー助かった…」と。そして防空壕の中から数々のものを運び出してみた。だが玩具の車はとれ、絵本はぬれてページもめくれない。お人形箱の中のお人形にそっとふれてみたが手も足もバラバラ、壕の中の湿気のためなのであろう。

「あーあー」と泣く幼な子を宥めながら何とか直し、子等の笑顔にあいホッとしたものだった。

あー、戦時中になくしたものは大きい。物品、そして精神的なもの…が。

青一色の朝空を見上げフーと息づいた今朝のわ・た・し。

地方自治の移り変わり

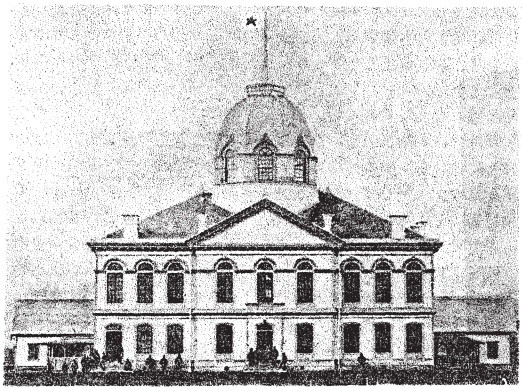
―蝦夷地から北海道へ―

戸長役場（こちょうやくば）

明治五年、政府は幕府の時代から続いていた庄屋・名主・年寄という村役人の制度を廃止して、名称も戸長・副戸長などと改めました。

北海道でもこの制度が取り入れられ、開拓使からその人選をするよう達しがありました。

戸長の役目は、これまで名主がやっていた戸籍や事務のほかに、官庁からの通達をもれなく住民に伝え、住民からの願いや届けなどを官庁へ取り次ぐこと、また、官庁からの調査など国の末端事務をすることも定められていました。当時は町村議会もありませんでしたから、その他にも、官庁と住民の間のいろいろなことに立会をして、その意思の疎通を図ることも大事な任務でした。



←明治六年完成の開拓使札幌本庁（明治二二年失火で焼失）

戸長には職務概目（仕事の内容を示したもの）というものがあって、大よその職務は定められていましたが、地域の事情によって職務の内容や報酬、選任の方法などもまちまちでした。

戸長に任命された者は、それぞれ職業を持っていましたがそれは黙認されたようで、自宅を事務所にすることも認められていました。

古平郡…戸長一人　美国・積丹郡戸長を兼務
　　副戸長二人
美国郡…副戸長二人
積丹郡…副戸長一人

古平郡では名主を戸長、それ以外の村役人を副戸長としましたが、達しによって戸長、副戸長の人数が減らされてしまいました。

しかし、用務が多いことから古平郡に副戸長一人、美国郡に戸長一人の増員を願い出ましたが、これは認められませんでした。

戸長と名称が変ったのも、戸籍法を定めて、国にとって最も重要なその戸数人員を確認するための仕事を第一としたからです。

明治五年、日本で初めての戸籍が作られることになりました。この年は干支でいうと壬申（じんしん＝みずのえさる）でしたので、壬申戸籍（じんしんこせき）といわれています。しかしこの戸籍は、記載されている内容に差別的な用語や、個人にかかわることの記載が多くあることから、後に焼却処分されました。

戸長らには、次ぎのように月俸が支給されました。

戸　長　八円～一〇円
副戸長　六円～七円
総　代　五円

※当時の米の価格（東京）は、一石（一五〇㌔）が平均して五円五五銭、東京の巡査の初任給五円とありますが、これは領価二万四千円という本から、その値段を信用してここに載せました。

明治五年一月、古平郡内の人口調査が行なわれました。

浜中・歌棄・沢江・沖村
戸数　一八〇戸
人口　五八一人
　男　三〇五人
　女　二七六人

垂美村（港町）・入船町・群来村
戸数　一三九戸
人口　四四六人
　男　二二七人
　女　二一九人

古平郡古民（アイヌ）
戸数　二八戸
人口　九五人
　男　五一人
　女　四四人

職業別戸数と人口
官吏　五（戸）　一〇（人）

神社	一	四
寺院	一	三
医師	—	八
農業	六	二一
漁業	四六	七六〇
工業	一七	五九
商業	二四	九六
雑業	二二七	六六
合計		一〇二七

※ 漁業戸数に較べて人口が少ないのは出稼ぎ漁夫と考えられ、雑業戸数が多く人口の少ないのは理由が不詳、アイヌ人口を除いている。

←戸長役場の人々・洋服姿が石井常助戸長（石井家所蔵）

明治一二年、北海道にも郡区町村編制法が適用され、一三六町村に新法による戸長役場が設置されましたが、一戸長役場が、数か町村の行政を兼ねるというのが普通でした。

また、北海道では戸長は開拓使からの辞令によるものが多く、本州のような町村制もなく、明治北海道だけの一・二級町村制（古平町は明治三五年、この制度によって二級町村となり、同四〇年、一級町村となります）が全道で行なわれる大正一二年まで、町村議会もないという戸長役場が各地にありました。

明治一三年の戸長辞令がありますが、郡内の戸長役場は次ぎのように各地域を管轄していました。

幾井旧七 ＝ 沖・歌棄・沢江
西嶋金八 ＝ 入舟・新地・丸山・群来
石井常助 ＝ 浜町・湊町

開拓使古平出張所廃止

明治八年八月三一日付で古平出張所が廃止となり、古平・美国・積丹の三郡は開拓使民事局の管轄となりました。

これは、これまで後志のうち本庁で所轄していた余市出張所（余市・忍路）と古平出張所は札幌の本庁にも近く、廃止しても事務の処理に不都合はなく、また、これによって費用の負担も減少することから、二つの出張所を廃止することにし、民事局からの職員が在勤することになりました。

開拓使第五大区務所

明治九年、北海道大小区画制度が施行されることになりました。

これは全道を八三の大区と七四の小区にする、というものです。

後志国を六大区に分け、小樽・高嶋の二郡は第三大区で小区は六、忍路・余市の二郡は第四大区で小区は六、古平・美国・積丹の三郡は第五大区で小区は六となりました。

そして浜町に第五大区古平郡区務所を置いて、古平・美国・積丹の三郡を管轄することになりましたが、この年、浜中村を浜町に、垂美村を港町に、新地町と入船町の一部を分割して丸山町としました。

また、これまでの戸長事務所を戸長役場と改称しています。

開拓使官僚の官等・月俸（明治五年一月改定）

長官	次官	判官	権判官	監事	権監事	大主典	権大主典	少主典	権小主典	史生	使掌
五〇〇円	四〇〇円	二五〇円	二〇〇円	一〇〇円	七〇円	五〇円	四〇円	三〇円	二五円	二〇円	一五円

札幌通信 第31信

春だけなわ

吉川義雄

雪に痛めつけられて、枯れ木のようになっていた一叢の細い枝々に、小さな蕾がびっしりとついたと思っていたら、ほんの二日程の晴天で、ツツジの花が爆発したように咲いた。

雪の深かった分、土の露出は当然遅れたが、生命の営みは、それなりに引き退るようなヤワなものでは決してなかった。

退院して以来、後遺症とかで左足の痛さにかこつけ、次第に外出の機会をな失くしていたが、無理を承知で外に出てみた。

わが家を取り巻く数軒の家々の庭は、手入れが行き届いているから、それこそ百花繚乱の姿で陽光に輝いていた。

古平の家で、親父が小庭を造っていた頃、冷ややかに眺めていた罰か。心から草花と親しんだ覚えがないから、自分でもイヤになる程花の名前を知らない。

教わってもすぐに忘れるから、先天的に花嫌いかと思えば、私の描くのは花ばかりだから、「なら、覚えろ」と自分に言いたい。

他人の庭先や、道端にタンポポの多いことに目を止め、改めて春酣になっていることに気付き、慌てて感動する。

「YOSAKOIソーランまつり」が、大急ぎでやってきて、雨の降らない内にアッという間に終わった。

そーらん節の故郷、古平や余市から、一度もチームがやって来ないのが妙にさびしいが、にしんとは全く関係のない札幌が会場だし、本州の各地どころか、外国からもチームがやって来る程だから、新しい文化が出来上がって、民衆の喜びが健康に育っているのは、本当に喜ばしい。

戦後の古平で、青年会長を十年間もやらせていただいた頃のハネッカヘリ時代。それをフト思い出して、

「俺が若かったらなァ……」

と、ついグチッポイ一人言を言ってしまったからたまらない。私の若さに溢れた、栄光の青春時代なんか知らないし、知ろうともしない娘が、アッサリと退けた。

「フン。自分の始末も出来ない者に、誰がいったい付いて来るのよ……」

――人は、青春の想い出に生きるものである――

私の口ぐせの言葉を、またも、しみじみと思い出すハメになってしまった。

わが家に隣接する南側のお宅は二軒あって、片方はブロック壁、片方は生け垣になっている。引っ越して五年ほどになるが、両家の人を庭越しに見たことがない。都会生活とはこうしたものかと達観している。

ただ、生け垣の一部に大輪の花が次々と咲く。それがほとんどわが家側に咲くので、うれしいやら、お気の毒やら複雑な気分だ。

例によって、花の名前を妻に尋ねたら、「あれは多分ボタンでしょう」と答えてくれたが、翌日は、平気でシャクヤクと言っていた。

何れにせよ、午後の日差しに、豪華な白い大輪の花が、全部こっちを向いて挨拶をしてくれるので、ボタンとシュクヤクくらいは、すっきりと覚えたいもの。

わが家は、南側の八畳二間とも、全面に近いガラス戸や窓だから、いやでも明るい。うら庭と呼んでいる手入れの行き届かぬ庭は、野草が喜んで居付く。気付いて見ると、紫色の小花がきれいに屋敷の周りを囲み、風に揺れて懸命に存在を知らせている。勿論、名前なんか知らない。

古平時代と、自分を区別している生活の内、にしんと共にやって来る春の中で、少年に野の花と言えば、カタクリと、エンゴサク（図鑑で知る）くらいのもの。

軍隊に入り始めた頃の札幌生活。そして戦争、十数年を経て、無事に古平の山野に抱かれても、一輪の花にもご挨拶できなかった自分に気付く。春はまた、きっと何かを教えてくれているはずだ。「覚えろ」

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

31　橘　義春

ソ連軍の国境侵攻 ～続く

「やーしばらく、元気でやっていたか」

と相変わらずニコニコして、忙しく動き回っていた。

間もなく佐藤清が、暗号手として、最前線の半田国境陣地へ先発することになった。

「橘、行って来る」

「佐藤、気をつけてな」ただそれだけの会話だが、これが彼との最後の別れの言葉になってしまった。

泉部落で夜になり、雨はますます激しく土砂降りの雨となった。その中を恵須取まで歩き、資材や食料をトラックに積み込み、全身ズブぬれのまま古屯目指して走り出した。

戦友・佐藤清のこと ～佐藤清は北海道の砂川町（現在の砂川市）の出身で、彼は私と同様に東京で働いていた。それも私は麻布で彼は芝、すぐ近くにいたことになる。そんなこともあって、初年兵の時から特に親しくしていた戦友である。

昭和二〇年八月一一日、泉沢小隊の暗号手として奮戦中敵弾を受け重傷を負ったが、「やるんだ、やるんだ」と、闘志を燃やしながら息を引き取ったという。彼らしい立派な最後だが、彼は軍隊を除隊になったら、また東京へ出よう、東京が大好きだと言っていた。彼には東京に大きな夢があったはずだか、戦争が一人の若者の人生を狂わせてしまった。運命とは残酷なものだ。

終戦後、収容所の中で赤間伍長（伊達市出身）から彼の戦死の状況を聞き、惜しい戦友を亡くした悲しみに、寝床の中で一人涙を流した

神無川の付近に布陣

八月一〇日午前零時三〇分、第一大隊本部は古屯駅に到着した。直ちに神無川を背にして、中央軍道の西側に大隊本部を設営し、私達はタコつぼを掘り布陣した。

夜が明けると、「ドドーン」というソ連軍の砲声が聞こえてきた。これで本物の戦争が始まったナ、という実感が徐々に深まってきたが、まだ何か心の中でふん切りのつかないものがあった。実戦は初めての体験であり、初年兵の前では古年兵らしく振る舞ってはいるが、心の中は死に対する不安でいっぱいだった。

第一機関銃隊の浜田中隊長が、大隊本部に作戦の打ち合わせに来られたとき、同年兵の中田ラッパ手が護衛で付いて来たことがある。中田はラッパの修業時代に友達になった一人である。久し振りの再会であり、中央軍道の道端で積もる話をして別れた。

彼は戦後、密航して北海道に渡り、私達より早く故郷に帰っていた。後に戦友の石島からこのことを聞きびっくりした。この日は砲声は時々聞こえるが、敵の大部隊の攻撃はみられず夜となった。

八月一一日

半田陣地陥落す

夜明けと共に敵の砲撃が始まった。一五センチ榴弾砲か自走砲と思われるが、「ドーン」と音がして何秒か経つと、中央軍道の北の方から砲弾が、「カラカラ」と乾いたような音をたてて自分達の頭上を飛んでいき、遥か彼方の後方で落下する。

どうも敵は幌見峠を攻撃しているらしい。ここにはコンクリートで造った兵舎と望楼があり、以前は高射砲も配備していたので、敵は日本軍の要塞と思ってるらしく激しい砲撃がしばらくは続いた。　<続く>

戦中 中戦

泣き笑いの樺太漁場体験記

戦後 後戦

吉野慶一郎

突然呼び止められて、一同はギョッとしました。

振り返ると、いつの間にか別のソ連人と将校や通訳が立っていて、

「帰る前にもう一つ別の仕事がある。すぐ取り掛るように」

とのことでした。

その仕事というのは沖合い千メートル程のところに停泊中の貨物船に、荷物を積み込むことでした。荷物はといえば、それは真岡の王子製紙工場で生産した各種の巻取り用紙です。

ちょうど現在のトイレットペーパーの超大型のようなもので、巻き取った輪の直径が一メートル、長さが二メートルから、直径一．五メートルという大物まであって、紙の種類によって形も重量も違い、百キロから三百キロぐらいはある代物です。岸壁の雪の上に無造作に放置されている無数の巻取り紙をデッキはしけ（艀）に積み、さらに曳き船で沖の本船へ積み込む仕事です。

この説明を聞いて、これはエライことだと怖じ気づいてしまいました。こうゆう仕事は、熟練した専業の沖仲士といわれる人達の仕事であって、慣れない素人にとってはとても危険な仕事なのです。ましてやこれが夜間作業ともなれば、それこそ命がけと言ってもいいでしょう。

全く経験もなく、自信のない仕事なので一同で相談をし、

「私達は漁業用塩の陸揚げにチェホフ（野田町）から派遣され、今日で五日間も休みなく作業を続け、今ようやく任務を終了して戻る予定である。突然の任務外の仕事を命ぜられても、今は疲れているし食事もしていない。どうか寛大な慈悲をもってこの仕事から外していただきたい」

との意味のことを懇願した。

しかし、こんな虫のいい願いはかなえられず、かえって相手を怒らせるだけの結果だったようです。将校が、

「今夜中にぜひやってもらう。本船が待っているのだ。食事は本船で支給する。早く仕事にかかれ！」

と声を荒げ、腰から拳銃を抜いて、文句があるかと言わんばかりの威勢でした。私達を侮蔑したような視線で銃口を一人一人に向け、おまけに薄ら笑いを浮かべていました。

進駐軍が来た日から、何時かはこんな場面に出合うだろうとは、漠然としながらも常に頭の片すみにはありましたが、いまそれが現実となってしまいました。

終戦後に真岡を襲撃し壊滅させた、凶暴なソ連軍の片割れとも思われるこんなヤツに服従するのは残念だが、こうなっては従わざるを得ません。

貴重な財産を略奪するような敵に銃で脅かされ、自分達の手で積み込む羽目に至った不運な巡り合わせを恨み、敗戦の惨めさを痛感させられました。

全く未経験な作業でしたが皆で知恵を出し合い、作業をしているうちに作業のコツも会得したようで、何とかデッキはしけに積み込み、大小百個程の荷物を片付けることができました。

荷物と共に乗せられたデッキはしけには暖房も無く、零下十五度という海上の風は身を刺すようでした。暗闇でのタバコの火が螢のように明るく、宙に浮かんで見えるのが不思議でした。曳き船の速度がいやに遅いと文句も出る始末でした。

やがて本船に到着すると船からの照明灯が眩しいくらい明るく、なぜか急に生き返ったような気分になりました。約束どおり食事の支給がありました。白い食パンと熱い紅茶でしたが、この場で食べる余裕はありま←

教科書のいま～むかし

◇『忠君愛国』を強調

国定教科書になって一期のものは、時代が変わったことで、人々に新しい知識を広めようという意図を持っていましたが、明治四三年から使い始めた国定二期の教科書では、明治三七、八年の日露戦争後でもあり、軍国主義の色彩の強いものとなりました。

国語の巻一では「ハタ　タコ　コマ」という、国旗から始まる忠君愛国を重視するものでしたが、これにも理由がありました。

国定になって一期の教科書が出ると、社会では賛成・反対と大きな反響がありました。特に修身の教科書については「祖先から続いてきた皇国、君臣、親子、夫婦、兄弟などの間での義理などに欠けるものがある」という批判が出ました。このようなことから、軍国主義的なものを強調した内容となったのです。

この二期になると、一期に断然多かった西洋人が急に少なくなり、それに替わって二宮金次郎が、あらゆる美徳を兼ね備えた代表的な人物として登場してきました。

また当時、国語や音楽の教科書にあって、子供たちにとっても印象が深く、全国的によく歌われた教材は「水師営の会見」でした。この教材は武士道的な、敵であっても称賛する気持ちが受け入れられ、そこに明治時代の精神がにじみ出ているものがありました。

五年生の「尋常小学唱歌」

一、旅順開城約なりて
　敵の将軍ステッセル
　乃木大将と会見の
　所はいづこ水師営

←せん。身体が凍えてしまいそうでした。先ず作業に取り掛りました。荷物をワイヤーロープで安全に縛り、ウィンチ係のソ連船員と呼吸を合わせ、合図の手を上げるとはしけから引き上げるのです。

私達漁業者は、ワイヤーロープを操作するコツは十分に心得ています。大きな掛け声と共に作業はスムーズに進みます。

「ヤンサノゴツオコイ」と、漁場仲間の切り声もいつか、「ロスケノバッカヤロー」と言葉を替えて、憂さばらしに叫んでいましたが、日本語を知らない船員達には全く通じません。それどころか日本人の手際のよい仕事振りに感心してか、笑顔で協力してくれ嬉しそうでした。そして、

「ヤポンスキーハラショー」（日本人はいい人だ）と叫んでいました。

命令で動かされる彼等労働者には、戦争の勝敗など無関係なのでしょうか、皆いい人達でした。

港に戻る曳き船の速度は行く時よりは遅くかんじられましたが、ようやく岸壁に着いた時は一切を忘れて、皆で無事に生還したことを喜び合いました。

〈続く〉

町史編纂室の資料などの公開

古平町広報六月号でもお知らせしましたが、編さん室で所蔵している文書類・写真などを、今回、初めて公開することにいたしました。実際の資料や編さん室の仕事の状況をご覧になり、古平の歴史についていっそうの興味と関心をもってほしいと考えております。

日常の仕事や場所のことなどもありますので、次の要領で第一回目の公開をいたします。

★日時＝七月一五日（金曜日）
　午前一〇時～一二時
★人員＝三名とします
★締め切り＝七月一〇日
　申し込み・町史編さん室
　電話・42－2590
　教育委員会へつながります。
　内線65と言ってください
★場所＝文化会館図書室
★当日の資料については用意しております

申し込みの多いときは、今後継続する予定です。お申し込みをお待ちしております

四、昨日の敵は今日の友
　語る言葉も打ちとけて
　我は称えつかの防備
　かれは称えつ我が武勇

というもので、戦前の教育を受けた人であれば、懐かしいものがあるかもしれません。

※かなの表記は変えています。

また、巻七の国語『西洋紙と日本紙』は、この期を代表する教材だといわれています。少し長いのですが紹介します。

西洋紙が日本紙に向かって、

「世の中が開けてから、どうも君たちの仲間よりも、僕らの仲間の方がよけいに用いられるようになったかと思う。まず毎日の新聞は西洋紙であるし、書物も近ごろはたいてい西洋紙になった」

というと、日本紙は、

「まずこの座敷を見ても、この沢山の障子は皆僕等の仲間ではってあるではないか。ここにある扇もうちわもそうだ」

西洋紙は、

「君等は表だけしか役に立っていないが、僕等は裏表とも使われる。便利さにおいてとてもかなうまい」

日本紙は、

「いやいや君等は破れやすくて、強みというものがない。日本紙はコヨリにしてものを縛ることができる。元結(もとゆい)や水引のような丈夫なものは日本紙でなければできない」と自慢します。西洋紙は負けずに、

「君等は水にぬれるとすぐにべたべたになるが、僕等は少しぐらい水にぬれても裏へは通らない」

日本紙は笑って、

「僕等の仲間には唐傘(からかさ)になったり、合羽(かっぱ)になったりするものがある。水にぬれるぐらいはなんでもないことだ」

西洋紙はまた、

「葉書や切手や印紙などは、皆僕等の仲間だぞ」

日本紙は神棚を指差して、

「そんなにいばっても、あの神棚の御札(おふだ)や御幣(ごへい)にはなれまい」

といいました。

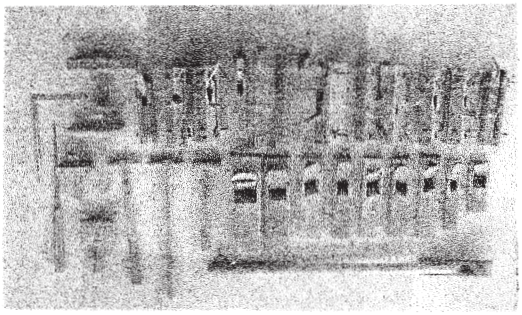
※原文のかなの表記はカタカナですが、かなに置きかえています。

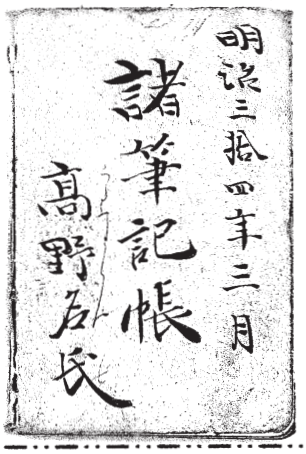
〇の読みは書き加えたものです。

ここでは西洋紙はまず新聞紙、本などを持ち出して、西洋文明を主張していますが、日本紙は日本古来のものが質的に優秀であると反論しています。また、西洋紙は葉書や切手などを持ち出して社会的に有効であることを示すと、日本紙は信仰としての神棚や御幣をもってきて相手をへこまそうとしています。

ここに一貫している考え方は、文明開化の波にのってどっと押し寄せてきた西洋文明に対して、日本文化や精神が優れているのだ、ということを主張していることです。それは、いわば西洋の物質文明に対する、日本の精神文化の優位を信じていることの現われです。この考え方は、後の戦争にまで尾を引きました。

この二期の修身教科書では国民道徳が強化されて、のちのちまでの家族国家という考え方が重視されるようになりました。





→高野名幸作さんの手帳　小樽に出て昼は商店で働き、夜学の英和学校で学ぶ（一六歳）高野名正治さんから寄贈

↑船大工の道具類、大のこほか四三点　高野太郎さんから寄贈

★貴重な数々をご寄贈いただきましてありがとうございます。

短歌

古平町岬短歌会

わが町の歴史綴りし「せたかむい」誌に鰊場のこと繰りかへし読む　池田テル

新らしき制服姿の写真に添へ「やってゆきます」と伊緒里の手紙　鈴木時子

音もたてず足早に看護師さん奥の病室へ急ぎ入りゆく　竹内コト

やうやくに蝦夷春蝉の声を聞く暦の上はもう夏なるに　田中香苗

菜園の発芽よろしきこの朝春蝦しきり鳴き交しおり　丹後初江

積丹の海見渡せる丘の上風吹き上げて笹鳴りやまず　寺内りよう

水芭蕉座禅草咲く棚田あと水のたまりてちぎれ雲浮く　東美知

きらめきて前浜の海凪ぎとなり今日より雲丹の解禁となる　堀典子

俳句

古平俳句会

裏山の新緑の息深く吸う　斉藤波留

白雲を捕へし如く山の花　山口悦子

園児手に持つカーネーションの坂下りる　越野敏雄

まだ土の濡れて筍送り来し　大和田絵伊

沖をゆくフェリーの速さ夏の雲　高橋重子

二分咲の開花宣言待ち侘びし　仲谷比呂古

夏海や行き交ふ船の揺れ止ず　室谷弘子

空せまし勢ひに乗り鯉のぼり　泉清三

山萌えて心浮き立つ芝桜　外山俊久

夕凪の出漁の船浜薄暑　渡辺嘉之

薫風に潮の香ぐんと加わりし　堀典子

風薫る武士悲恋の神威岬　本間寿昭

沖かすみゐる一湾の視界なる　越野清治

古平町史年表

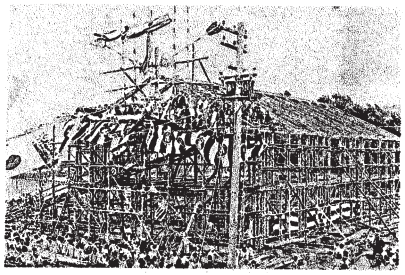
昭和１３年（1938）～続き

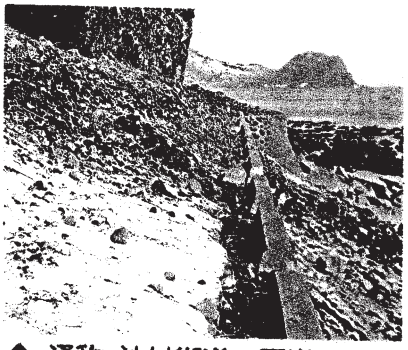
▲物資の統制により、町内でも業種別に各種の商業組合が発足する
▲北海道漁業組合連合会（道漁連）が設立される
▲在郷軍人会古平分会の射撃大会がススキナイで行われ、大勢の見物人が集まる
▲日支事変（後に太平洋戦争と呼称）で高島の漁船第二十梅丸が徴用され、乗組員の港町・成田成幸が戦死する
▲先年火災のあった中央劇場跡地に再び劇場が建設されることになり、地鎮祭に続いて上棟式が行われる
▲古平町を含めた地域（北海道中部）の防空演習が３日間にわたって行われ、小学校でも避難訓練が行われる
▲沖村海岸道路で落雪により嵯峨ハルが死亡する

昭和１４年（1939）

▲在郷軍人会古平町分会による銃剣術大会が古平小学校で開かれる
▲青年学校が義務制となったが、従来通り古平小学校に併置され週５～６時間の授業が行なわれる（高等科を卒業して男子５年・女子３年）
▲毎日新聞社（小学生新聞・記者）渡辺善房の童話会が古平小学校で開かれる
▲青年総動員運動で、古平連合青年団が農会の指導を受け耕作を始める。女子青年団員がグランド周辺でジャガイモの植え付けをする
▲毎月１日を興亜奉公日と定め、戦争遂行に沿った行事が計画されるようになる
▲日用品の切符制が全国で実施される
▲北海道振興報徳会が創立（昭和１５年）されたことで、古平振興報徳会が組織される、会長に梅野富蔵が就任
▲禅源寺［五百羅漢］が完成し、開眼供養が行われる
▲古平消防団が古平警防団に改組される
▲北後志すけそ延縄漁業連合会が発足する
▲北海道拓殖銀行古平支店店舗が落成する

↑ ススキナイ射撃場の風景


↑ 古平劇場の上棟式


↑ 通称・沖村街道の雪崩のあと

↑五百羅漢の作者・林竹治郎画伯